

巻頭言

歴史を超えてく新しい仏教との出会い

仏教文化研究所所長

河 智 義 邦

二五〇〇年を超える歴史を有する仏教がインドで誕生し、アジア諸地域で多様な展開を遂げていったことは周知の通りです。大乘仏教思想が积攒滅後数百年経ってから成立し、その伝統の中で日本で広く定着している宗派仏教が誕生したこともまた、多くの一般の人々に認識されてきているように見えます。さらに、近代以降の実証的研究やインターネットの普及によって、釈尊在世時の初期仏教の原型の様相が解明され、寺院や学校に行かなくても、誰もがその教えや実践の内容に触れることが出来るようになっていきます。現在の日本では、その原型の伝統をそのまま伝えると自負される南伝系部派仏教の出家者の方々の活動も盛んで、その影響によって、仏教徒とか宗派仏教の檀信徒であるといった自覚とは別のところで、原始経典の言葉や思想を紹介した本を購入して学ばれたり、古来の呼吸法や瞑想など身体性を有する宗教体験に魅力を感じる人も増えてきているようです。それは大乘的宗派仏教と儀礼的・文化的な面では関わることのなかった現代の人々が、歴史（大乘仏教の伝統）を超えて出会う、いわば「新しい仏教」のすがたであり、新鮮味を感じて受け入れられているような印象を受けます。

個人の感想レベルになります。そうした活動をされる方の中には、日本的な宗派仏教に対する穏やかなる批判をされる言説もあるようです。端的に言う、非仏教的であるというような指摘です。大乘非仏説論というのは、今に始まったものではなく、これはこれで古い伝統を有しています。それとも関連しますが、右の非仏説論は、事実はともかく、日本仏教には南伝系に継承されてきたような厳格な出家者の存在が無いということ、大勢が呪術宗教化してしまって、「法」に基づくものになっていないのではというのが基調のようです。そうした言説には真摯に耳を傾けつつ、一方で、大乘仏教がなぜ発祥の地であるインドで興起したのか、また宗派仏教化したり、在家仏教が中心となっていたかなどの歴史的、教理・実践論的な展開はあまり理解されていないようにも見受けられます。

「一切世間に於いて一切世間を離れ一切世間に住す」「世間法は欲が支配し、出世間法は欲を支配する」等、伝えられる釈尊の言葉には、私たちが迷いを離れる人生を生き抜くため、際限なき欲望から自由になつて生きるためには、欲望に振り回されずに日常生活を生き抜いていく智慧を説いた「出世間の法」に学び生じることが示されています。仏教の長い伝統の中では、そのことを時代や地域性などに合わせて、様々なすがたをとって（方便）伝えられてきたのだと思います。本学園の建学精神とゆかりの深い浄土真宗は、在家仏教の典型とも言えますが、その基本は「非僧非俗」（親鸞聖人）、「仏法をあるじとし、世間を客人とせよといへり。仏法のうへよりは、世間のことは時にしたがひあひはたらくべきことなりと云々」（蓮如上人）であり、「法」を依りどころとして生きることを継承しています。

バラエティー豊かな日本仏教のすがたを見つめながら、大切なことは、そこに欲望深き自己に気づかせ、それを抑制して生きることを志向せしむる教えと実践が提示されているかどうかではないかと思えます。

『岐阜聖徳学園大学紀要』第十七号をお届けいたします。ご執筆賜りました諸先生方にお礼申し上げますとともに、法義相続の念をもってご高覧賜りますようお願い申し上げます。

平成二十九年（二〇一七年）三月三十日